St. Luke's International University Repository

オンライン実習プログラムを用いた周産期看護学実習の取り組み

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): COVID-19, online training, simulation program, maternity and newborn nursing 作成者: 岡, 美雪, 五十嵐, ゆかり, 下田, 佳奈, Oka, Miyuki, Igarashi, Yukari, Shimoda, Kana メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00016575

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

短　報

オンライン実習プログラムを用いた周産期看護学実習の取り組み

岡　美雪　五十嵐ゆかり　下田　佳奈

Approaches Toward Maternity and Newborn Nursing Practice Using Online Practice Program

Miyuki OKA　Yukari IGARASHI　Kana SHIMODA

〔Abstract〕
In 2020, the spread of COVID-19 resulted in maternity and newborn nursing practices being conducted by replacing clinical practice with on-campus and online practice. The content of the training consisted of the following three parts: (1) on-campus exercises, (2) online nursing skills and communication exercises, and (3) online continuous training using simulated patient cases. On-campus exercises were adjusted to allow for learning practice related to online nursing skills and communication exercises. In the online continuous training, we created patient information for simulated patients of the pregnancy, and delivery period, progress table of the puerperal and neonatal period, and a video of women after childbirth for eight simulated patients. Learning using audiovisual materials online tends to become passive learning because it takes more time for individual learning than clinical training. However, it presented an opportunity to learn interactions by conducting role-plays using on-campus exercises and the ZOOM software program. In addition, by providing simulated patient information from medical records and videos, students were able to imagine the situation of mothers and babies after childbirth and understand the development of the nursing process. We would like to improve the online teaching materials based on the issues that were encountered during these practices.

〔Key words〕 COVID-19, online training, simulation program, maternity and newborn nursing

〔要　旨〕
2020年 Covid19感染症蔓延に伴い周産期看護学実習は，臨地実習を学内演習とオンライン実習に代替して実施した。実習内容は，①学内演習，②オンライン看護技術・コミュニケーション演習，③オンライン実習プログラム（事例を用いたオンライン継続実習）の３部構成とした。学内演習は，オンライン看護技術・コミュニケーション演習での学びの実践の場となるように調整した。オンライン継続実習は，患者８事例分の妊娠期，分娩期の経過，産褥期と新生児期の経過表，褥婦の動画を作成した。オンラインによる視聴覚教材を利用した学習は，臨地実習と比較すると個人学習の時間が多く受動的な学習となりやすいが，学内演習や ZOOM を利用してロールプレイを実施したことで主体的な関りを学ぶ機会となった。また，患者情報をカルテと動画から提供したことで，産後の母子の状況をイメージでき看護過程の展開を学ぶことができた。今回見えてきた課題をもとに，オンライン教材を改善したい。

〔キーワーズ〕 新型コロナウイルス感染症，オンライン実習，シミュレーション教育，周産期看護学

聖路加国際大学大学院看護学研究科・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science

受付　2021年10月20日　受理　2021年11月16日

Ⅰ．はじめに

2020年４月，Covid19感染症蔓延に伴う緊急事態宣言が発出され，東京を含む７都道府県で実施された。これを受け，同年６月22日厚生労働省より「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う看護師等養成所における臨地実習の取り扱い等について」[1]が発表され，臨地における学修の担保ができない場合の対応について周知された。その対応は，実習目標に対する評価を満たし，臨地における学修に相当する教育効果を十分にあげられる場合に，模擬患者や紙面事例等での看護過程の展開を学修することを認められた。また，臨地での実践を，学内での演習に代替する場合は，シミュレーション機器や模擬患者等を用いて，日々変化する患者の状態をアセスメントする演習や学生同士による実技演習，患者とのコミュニケーション能力を養う演習等，可能な限り臨地に近い状況の設定し演習を行うことが提示された。

学部３年生後期のレベルⅡの周産期看護学実習は，聖路加国際病院で例年８日間の臨地実習を行っていたが，８月末学長と関係役職者との協議において，厳格な感染対策が困難であることから臨地実習は中止となった[2]。これを受け，周産期看護学実習は，臨地における実習を全て代替の方法で実施したため，本稿にて報告する。

Ⅱ．周産期看護学実習の概要

１．学習目標・到達目標

周産期看護学実習は，学部３年生後期に実施しており２単位の必修科目である。実習期間は10日間となっている。本科目の実習目標と到達目標は**表１**に示す。

２．周産期看護学実習の代替方法

実習は，①学内演習，②オンライン看護技術・コミュニケーション演習，③オンライン実習プログラム（事例を用いたオンライン継続実習）の３部構成とした。学内演習は，オンライン看護技術・コミュニケーション演習での学びの実践の場となるように，内容やスケジュールを調整した。

実習内容を**表２**に，実習スケジュールを**表３**に示す。学生はひとつのグループを２つに分けて，１週目と２週目の実習内容を交代して実施した。

３．オンライン継続実習のシステム運用と代替方法

Google ドライブ内に，患者８事例分の妊娠期，分娩期の経過，産褥０～４日目までの産褥期の経過表，生後０～４日目までの新生児期の経過表をカルテに似せたフォーマットで作成した。また，産褥０～４日目に褥婦の病室を訪問した場面を想定した動画（各事例１日２～３分）を設定した（**表４**）。動画の内容は，事例の状況が分かるようなセリフと状況を設定し，褥婦演者の自宅での撮影を依頼した。

クラウド型教育支援サービス manaba に，産褥日数ごとに個々の学生のページを作成し，妊娠期と分娩期のカルテのリンク先 URL（Google ドライブ）と，産褥期と新生児期の経過表と動画のリンク先 URL（Google ドライブ）の２つを添付した。学生は manaba からリンク先の患者背景と経過表，動画にアクセスし，そこから情報収集を行い，看護過程を展開した。看護過程の記録は，翌朝までに manaba に提出し，教員が記録にフィードバックのコメントの記入した後，manaba から学生に記録を

表１　実習目標と到達目標

実習目標
妊娠・分娩・産褥・育児期にある女性の健康状態を捉え，女性とその子どもおよび家族がより良い健康状態を生み出せるよう，また家族の新たな関係性の形成が促されるよう支援する。 さらに，女性のライフサイクルを踏まえ，対象者のセクシュアリティ，リプロダクティブ・ヘルス／ライツの視点等から，対象者にとってより良い健康状態を生み出すための看護について考える。
到達目標
１）家族ひとりひとりの健康状況や家族の相互関係の移行について理解に努める。 ２）家族にとってより良い健康を念頭において，必要な看護過程が実践できる。 ３）「家族の日常生活に基づいた視点」，「家族の状況やペースを尊重した視点」，「家族の力を支持する視点」，「家族の移りかわりに沿った継続的な視点」など，子どもの誕生期にある家族の看護の基盤となるとらえ方を説明できる。 ４）周産期看護学Ⅰおよび周産期看護学Ⅱなどで獲得した知見やリソース，Team-Based Learning（TBL）でこれまでに獲得した力を活かすとともに，看護職者をはじめとする様々な職種の人々との関わりからケアの実際や視点を学び，さらに看護者，学習者としての力を育みながら，対象者に必要な看護を議論できる。 ５）看護職者をはじめとする様々な職種の人々との関わりからケアの実際や視点に触れられる。 ６）対象の個別性や状況，家族の様々な変化を考慮し，対象者との関係構築について自らの考えを述べることができる。 ７）対象の個別性や状況，家族の様々な変化を理解するための看護技術，コミュニケーション方法を演習する。

表２　実習内容

実習内容
①学内演習 ・アーツルームで，妊娠・分娩・産褥・新生児期に必要な技術の演習を行う。 ・周産期領域で必要がコミュニケーション方法を演習する。 ②オンライン看護技術・コミュニケーション演習 ・映像教材を使用し，妊娠・分娩・産褥・新生児期に必要な看護技術について学ぶ。 ・周産期領域で必要なコミュニケーション方法を学ぶ。 ・病棟スタッフからの臨床ケアに関する講義を映像で受け，ケアの実際について学ぶ。 ③オンライン継続実習 産褥期・新生児期にある一組の母子を受けもち，分娩後から産褥４日目までの看護を展開する。産褥４日目に，ロールプレイにて教育展開の実施を行う。

表３　実習スケジュール

	月	火	水	木	金
１週目	技術・コミュニケーション演習	技術・コミュニケーション演習	学内演習	学内演習	学内演習
２週目	オンライン継続実習１日目	オンライン継続実習２日目	オンライン継続実習３日目	オンライン継続実習４日目	オンライン継続実習５日目

表４　オンライン継続実習内容

	オンライン継続実習１日目	オンライン継続実習２日目	オンライン継続実習３日目	オンライン継続実習４日目	オンライン継続実習５日目
基本情報 妊娠期・分娩期の経過	５日間継続して閲覧 →	→	→	→	→
産褥期・新生児期の情報	産褥・新生児０･１日目 →	→	→	→	→
		産褥・新生児２日目 →	→	→	→
			産褥・新生児３日目 →	→	→
				産褥・新生児４日目 →	→
訪問時の情報（動画）	産褥０・１日目	産褥２日目	産褥３日目	産褥４日目	―
看護過程のプロセス	情報収集・アセスメント 看護計画立案	情報収集・アセスメント 看護計画立案	情報収集・アセスメント 看護計画立案 教育指導案作成	情報収集・アセスメント 看護計画立案 教育指導案修正	教育展開案実施 （ロールプレイ）

返却した。その後，Web 会議ツール ZOOM を利用して学生と個人面談を行い，看護過程の記録を ZOOM 画面で共有しながらフィードバックを行った。オンライン継続実習の３日目には，受け持ちの褥婦が退院後の生活で必要となる課題に対して教育指導案を作成した。５日目には ZOOM を利用して，作成した教育指導案を基に，指導媒体資料を使用してロールプレイを行った。ロールプレイの方法は，教員１名と学生３～４名が ZOOM に入り，教員を褥婦役として学生が教育指導を実施する。他の学生は観察役となりロールプレイ終了後に，実施した学生にフィードバックを行うこととした。

Ⅲ．学内演習とオンライン実習プログラムを用いた実習の実際（2020年後期９～2021年１月）

１．学内演習とオンライン看護技術・コミュニケーション演習

10日間の実習期間の内３日間は学内演習，２日間はオンラインにて看護技術・コミュニケーション演習を行った。学内演習は，１日約３時間，マスク，フェイスシールド，手指消毒などの感染予防対策をとりながら，学生７～８名に対し教員もしくは Teaching Assistant（TA）１～２名が演習指導を行った。学内演習は，オンライン看護技術・コミュニケーション演習の内容を実践する場と位置付けた。事前にオンライン看護技術・コミュニケーション演習で映像教材をもとに，周産期における看護技術やコミュニケーション方法に関してワークシートを記入することで自己学習をし，すでに学習しているワークシートをもとに学内でロールプレイを実施した。事前に自己学習をしたことでロールプレイでの学生同士の活発なディスカッションにつながっていた。また，妊婦の腹部モデルや産褥期の女性の腹部モデル，新生児モデル，授乳練習用乳房モデルを使用して，妊娠に伴う各段階における観察方法とアセスメントについて演習を行った。教員もしくは TA は臨床現場の実際の話を例に出しながら，演習のフィードバックを行っており，妊産褥婦の背景や状況について学生の理解をサポートしていた。

２．オンライン継続実習

オンライン継続実習は，学生は主に自宅で実習を行った。manaba から Google ドライブ経由で，褥婦と新生児の情報と動画を閲覧することは操作上問題なく実施できていた。オンライン継続事例のシステムの運用は，実際の臨床現場の再現に近づけるため，産褥日数ごとにその日の経過表が更新されるようにし，動画は当日に１度のみ閲覧することとした。毎日教員が manaba のページを「公開」に変更する作業や，Google ドライブの動画に閲覧制限をかける作業を手動で操作しており，作業の煩雑さから幾度か操作を誤ることがあった。

学生は，Google ドライブ上の事例をもとに看護過程の展開の記録を作成し，それに教員もしくは TA がコメントを入力し，その後 ZOOM を利用して口頭でもフィー

ドバックをする形で指導を行った。臨地実習と比較して，教員と学生が話す時間が長く，教員は学生の学習の進捗状況を把握しやすく，学生は分からないところを十分に確認することができていた。

学生は，カルテと動画のみの情報で対象の背景や今までの経過や現在の状態を把握する必要があるが，多くの学生が実際に妊産褥婦や新生児と接した経験がなく，対象をイメージすることが難しかった。臨地実習と比較すると教員はより多くの時間を対象の状況や状態を説明することに使っていた。特に乳房の変化や授乳の様子，新生児の状態は，文字情報だけではイメージすることが難しく詳しい説明が必要だった。また，１週目に学内実習で妊婦や褥婦，新生児のモデルを使用して演習をしたグループは，カルテと動画から褥婦と新生児の状態をイメージしやすいようだったが，１週目に継続実習をしているグループはイメージしにくい傾向があった。

また，カルテ情報と動画のみでは，症状や状態の程度が伝わりにくいという傾向があった。例えば，疼痛があるとの情報はとれるが，対象の言動や表情などの非言語の情報が少なく，疼痛の程度をアセスメントするための情報量に制限があった。

教育展開案の実施は，ZOOM を利用してオンラインでロールプレイを実施した。教育展開案を作成することで，対象の退院後の生活の課題をアセスメントしたが，退院後の生活の情報と家族の情報が少なく，個別性を反映することが難しかった。ほとんどの学生はパワーポイントなどで媒体を作成して実施した。実際にロールプレイをすることで，対象に合わせた情報提供とコミュニケーションの演習の場となっていた。また，他の学生のロールプレイを観察することで，自身の実施を振り返ることに繋がり相互学習ができていた。

Ⅳ．学内演習とオンライン実習プログラムを用いた実習に関する学生の学び

１．学内演習とオンライン看護技術・コミュニケーション演習

学内演習では，モデルを使用しながら，教員や TA から臨床現場の話を聞いたことで臨場感のある演習となっていた。

「実際に助産師として経験のある先生方と進められて，臨場感があった」

「模型などを使用することで，より具体的に理解することができた

「助産師の方の体験談等を聞くことができて，学びにつながった」

オンライン看護技術・コミュニケーション演習で使用した，妊産婦やその夫・パートナーの気持ちを表出している映像教材は，対象の状況がイメージでき対象の理解を促すきっかけになっていた。

「映像を見て，妊婦さんや父親になる人の話を聞くことができ，想像しやすくなった」

「動画を通じて，女性へのケアと同時に，父親になる人へのケアの重要性を学んだことが印象に残った」

また，オンライン看護技術・コミュニケーション演習では主に自己学習であったことから，学生は学習ペースを自己管理する必要があった。自分のペースで学習を進められた学生と，学習のペースを作ることが難しかった学生がいた。

「自分のペースで学習を深めることができた」

「オンラインだと演習は中々難しいと感じた」

「ペースがつかみ辛かった」

２．オンライン継続実習

１）事例の情報と動画へのアクセス

事例の情報と動画にアクセスするには，manaba に添付してある Google ドライブのリンク先から閲覧する仕様になっていた。情報と動画の閲覧する際の操作に問題はなかった。しかし，リンク先 Google ドライブ内のファイル数が多く，必要な情報に即座にアクセスできずファイルを探すという作業をしていた。

「manaba から google ドライブのほうへと飛ぶリンクが添付されていましたが，そのおかげでスムーズに使うことができた」

「（カルテと動画の）サイトは manaba でまとめられて送られていたため，どこのコンテンツに何があったかわからなくなることがあった」

２）情報量と情報収集について

事例の看護過程を展開する上での情報量として十分であったと感じていた。

「情報量が多く，対象者の様子も動画として見ることができたので十分だと感じた」

「経過が詳しく書かれていたので，流れを掴みやすかった」

「必要な情報が全て載っていたため対象者を知るのには困らなかった」

「基本的な情報はカルテのような形で見られたので，情報収集がしやすかった」

「毎日の対象者の動画も，文面からではわからない表情や会話の様子が観察できるので，より対象者のアセスメントがしやすく感じた」

一方，対象と実際に会話ができず能動的な情報収集が

できないことに対して制限を感じていた。

「オンライン上の実習であるが故に，対象者と日々会話ができないという点では気になる情報を網羅することは難しいところだとは感じた」

3）受け持っている感覚や臨場感

オンラインでの事例だったが，毎日の対象の変化を動画で閲覧出来たことや，教員やTAからのフィードバックから臨場感を感じていた。また，5日間の対象の状態を把握し，看護過程の展開をしたことで受け持っている感覚を持つことができていた。

「情報をカルテのように提示していいただいたり，対象者の動画を1日1つ見られたりと工夫していただいたおかげで，想像していたより臨場感があった」

「情報がただ羅列されているのではなく，カルテのようになっていた点が，実習のような感覚でよかった」

「毎日先生と面談させていただいたことで，その方のある状況や，今後の見通しを整理することができ，それを踏まえて看護問題と看護計画を立案することで対象者の受け持ちをしている感覚があった」

一方，実際に対象と関わり情報収集をしていないことから，受け持っている感覚を持つことが難しかったという声があった。

「対象者にどのように話そうかまで考えられていなかった」

「自分で情報収集しているわけではないから，受け持っている感じはなかった」

「毎日の情報収集もロールプレイングできたら，より臨場感があると思う」

「（対象を）イメージするのに困難を感じた場面があった」

4）退院後の生活の情報について

得られた情報から退院後の生活や家族のサポート状況をアセスメントして，教育展開案を作成することができていた。

「貧血改善のための食事指導をするために，情報を整理したときに家族の協力状況や，その方の貧血程度から予測される身体の影響なども考えられたので，情報不足で困らなかった」

「退院後を見越した視点で考えられるようことができるような展開になっていた」

しかし，退院後の生活をイメージするには対象や家族の情報が少なくアセスメントが難しいという状況があった。

「家族のS情報があまりなかった」

「退院後のイメージをすることは，対象者一人の情報からでは難しいと感じた」

「家族の情報がもう少しあるとわかりやすいのかもしれないと感じた」

「妊産婦との毎日のかかわりがあったら，（退院後の状況をアセスメントするための）必要な情報を自ら考えて収集できたと思う」

5）記録の提出について

記録の提出と返却は，manabaから実施した。操作に問題はみられなかったが，提出するファイルの数が多いため，アップロードとダウンロードの作業を煩雑だと感じていた。

「特に困ったことや問題はありませんでした」

「特にやり方に迷うことはなく良いと思う」

「取り組みやすかった」

「提出しやすかった」

「紙ファイルでは一度出したものはファイリングしてまとめて出せば大丈夫でしたが，プロジェクトから過去のファイルをダウンロードして出さなければいけないのがやりづらかったです」

6）教員やTAのフィードバックについて

教員やTAのフィードバックは，提出された記録に対してコメントを入れたものを返却し，その後ZOOMで個別にフィードバックを行った。学生は，個別でフィードバックをもらったことで，自身の課題に気づき，学習を進められていた。学生は，自身の疑問点を質問しやすく，解決する場にもなっていた。

「毎日たくさんのコメントをくださったおかげで，自分の課題がわかりやすく，取り組むべきところも明確になった」

「ひとつひとつの情報をひとつひとつアセスメントするのではなくて，様々な情報からアセスメントするという根本的なことですが，フィードバックのおかげで理解しやすかった」

「丁寧にフィードバックがあって，とても良かった」

「随時コメントやアドバイスをくださったので，その都度，修正加筆ができました」

「記録のフィードバックをもとに，毎日面談してくださったおかげで，その場でわからないところも質問でき，より理解が深まりました」

「面談と記録のフィードバックのおかげで，知識が深まり，定着することができたと思っています」

「フィードバックされたものを直してから面談できたので，質問することができてとても有意義な面談でありがたかった」

「コメントやアドバイスなどをしてくださり次の領域

に活用することができました」
「質問したらわかるまで付き合ってくださいました」
「毎日相談できてよかったです」
「周産期の実習はオンラインでも非常に充実感がありました」
「特に継続実習は，日々先生の手厚いご指導があったからこそ，学びが深まりました」

Ⅴ．今後の課題と展望

臨地実習を，学内演習と自宅でのオンライン実習で代替することとなり，可能な限り妊産褥婦と新生児，さらにその家族の状況が伝わるように実習内容を構成した。オンラインによる視聴覚教材を利用した学習は，臨地実習と比較すると個人学習の時間が多く，自ら情報収集をすることや看護ケアの実践の場がないことから受動的な学習となりやすい。対象の方との主体的な関りを学ぶため，学内演習や ZOOM を利用してロールプレイを実施したことで相互学習が可能となり効果的であったと考える。

また，対象の情報をカルテに似せたフォーマットで提供し，さらに動画からも情報を得られたことで，産後の母子の状況をイメージでき看護過程の展開を学ぶことが可能となった。オンラインの模擬患者という特性上，情報量に制限があるため，教員の指導で補いながら学習を進めることが必要だった。

今後も社会情勢の動向により，臨地実習の実施方法は学内やオンラインでの学習を併用しながら柔軟に対応する必要があると予測される。また，オンラインでの視聴覚教材は，臨地実習での学びをさらに補強することも可能であると考える。今回新しい形態の実習から見えてきた課題を検討し，オンラインの視聴覚教材を改善していきたい。

引用文献

1）厚生労働省．新型コロナウイルス感染症の発生に伴う看護師等養成所における臨地実習の取扱い等について（令和２年６月22日版）［Internet］．https://www.mhlw.go.jp/content/000642611.pdf［参照 2021-10-02］
2）小山田恭子，小林京子，吉田俊子ほか．聖路加国際大学における COVID-19対策と学生支援．聖路加国際大学紀要．2021；7：126-30.